自己表現としての箱庭療法

谷口文章*

Sandplay therapy as Self-expression

Fumiaki Taniguchi : Faculty of Letters, Konan University

The purpose of this study is to recognize who I am, or to analyze what 'Self' in depth psychology is. In order to clarify the Self, the author utilizes Sandplay therapy as Self-expression Technique. We can perform realizing ourselves in the image of the internally constructed cosmos.

Towards that purpose, first, this paper considers the concept of 'ego', 'Self', 'I', which have vague meaning and are often compounded each other. Next, it outlines Sandplay therapy and shows how the cosmos constructs and reveals the internal Self in the Sandplay. Finally, this work illustrates that Sandplay therapy is an effective tool of analyzing Self-expression in our deep worlds as well as in our performances.

キーワード
自己表現　Self-expression
自己の概念　the concept of Self
箱庭療法　Sandplay therapy
パフォーマンス　performance

* 甲南大学文学部教授

I　自分とは何か――ナルシスの正体――

河神ケービーソスとニンフのリオペーの間に生まれたナルシスは，その生誕の時,「彼が自分自身を知れば,死が訪れるであろう」と,予言者から告げられる.

ナルシスは，美青年に成長して多くの乙女やニンフにいい寄られるが，誰も受け容れない．ニンフのエコーも，ナルシスに恋をするが，他の乙女たちと同じように拒否され，身悶えしてついに声だけになってしまう．エコーはその後，山に住み「こだま」となる．

ナルシスに拒まれた乙女たちは，彼のことを天に祈った．それを復讐神ネメシスが聞き，予言を成就するようにする．ある日，狩りを楽しんでいたナルシスは，喉がかわき森の泉で水を飲もうとした．その時，水面に映った自分の姿を見て恋をする．口づけをしようとしても抱きしめようとしても，水面に顔を近づけると消えてしまい，少し離れると再び現れる．見え隠れする自分の姿をとらえられず，彼は憔悴し，最後には短刀で自殺をする．その泉のほとりに流れた血から水仙（ナルシス）が咲く．

ここに，ナルシスが自己を知った時に予言が成就して，死が訪れたのである．

フロイトの自己愛の概念から離れて，ナルシス神話は,「自分（自己の人生）を知った時に死が訪れる」こと，見え隠れする真実の自己は存在論の問題であること，姿の見えぬ「エコー（こだま）」は自己との対話(モノローグ)であることなどを示唆する．

人間は人生の意味，自己の存在の確証，内的対話に支えられて生きている．そして「自己表現」は，言語や意識レベルだけではなく，非言語的で無意識のレベルからのエコーの囁きや叫びや，身体動作によるパフォーマンスによっても示される．

意識的で言語的コミュニケーションを超えて,「箱庭」というコスモロジーに現れる無意識的で非言語的コミュニケーションの自己表現の世界を，少し垣間見てみようと思う．

II　自己の不透明性――自己とパフォーマンス――

1.　自己関係としての人間

「人間は精神である．しかし，精神とは何であるか．精神とは自己である．しかし，自己とは何であるか．自己とは，ひとつの関係，その関係それ自身に関係する関係である．いいかえれば，自己は，関係がそれ自身に関わるという関係のうちにある．自己とは関係そのものではなくして，関係がそれ自身に関わるということなのである」(キルケゴール)．

このような自己は，それ自身にかかわり続ける一つの自律的関係であり，それは単に二つのものの並列した関係ではなく,「関係が関係それ自身に関わるような関係」である．つまり，自己とは，静止した二つのものの間の関係や固定した自己同一ではなく，動的に自己言及しながら差異化して自己関係を生みだす「本来的自己」である．それゆえ，みずからの力で自己関係を組織化しながら成長・維持・死んでいく本来的自己は，客観的自我と主観的自我，外的自己と内的自己という言語の性質から生じる平面的な二項対立によってとらえきれない．すなわち自律的な有機体としての人間は，言語表現によってとらえた二つの空間的な関係にある対象としての「もの」ではなく，そのような二つの関係を成り立たせる「こと」という，時間的な「自己関係としての自分」なのである．自己が事態的な現象の中で時間的なものであるということは,「最初にあった自分」(対象) と「自覚する自分」(主体) は差異化されつつ同一の自己であるという，生命を営み続ける自己関係の上に成り立つ主体なのである．

ところが，そのような自己は，二つの方向において不透明であるように思われる．一つは，人間の内面に持続的な時間性をもった対象化できないものとして，つまり「意識的自我と，無意識のうちに潜む自己」の関係について不透明であり，もう一つは，人間を取り巻く空間的な自他関係について，つまり「身体をもつ人間と固有環境」の関係について不透明であるといえよう．つまり，

一方では，身体内において生命・本能・生理・無意識的なレベルで自己を存立させる内的関係性をつむぐが，それを意識上にすべてを浮かび上がらせることはできない，という意味で不透明である．他方では，身体外において他者である他我・家族・社会・国・自然などのレベルで自己と共生や競争の外的関係性をつむぐが，外的環境自体が偶然性に満ち，また空間的に無限の広がりをもつ，という意味で不透明である．

このようにして，“自己関係性としての人間”は自己存在を確信しながらも，他方でその自己は内的･外的に不透明性の中に浮遊する不確かな存在でもある．

本稿では，箱庭療法がテーマであるので，内的関係性の不透明性に主として言及し，外的関係性のそれは別の機会に論じるため簡潔に触れるにとどめる．

2. 内的関係性の自己――自我と自己の関係――

内的関係性としての自己は，心理学的に，「自我と自己の関係」から分析するのがわかりやすいであろう．

ユング流に述べると，“自分”を構成するものとして「自我（エゴ ego）Ich」と「自己（セルフ Self）Selbst」がある．意識の中心として自我と，意識と無意識を含めた全体を統合する自己があると仮定する．

自我と自己が，内的関係性を柔軟に保ち生命エネルギーが滞ることなく循環している時はよいが，自我意識が自分にとって都合の悪いものを抑圧や禁圧する時，無意識界に大なり小なり感情のしこりが生じる．それが契機となって，フロイトのいわゆる「病理的退行」の現象が生じる．

ユングは，「こだわり」や「コンプレックス」によって生じる退行現象を，フロイトのように病理的レベルと考えるよりも，創造的な可能性としてとらえる．つまり人間の退行現象は，「創造的退行」であると考える．その場合，こだわりやコンプレックスを克服するために一度退行して内なる声（エコーのモノローグ）を聞き，自己関係の修復を創造的にする．それは，無意識の世界という不透明性の中から「個性化の過程」を行い内的透明度を増すことであり，可能性の「自己実現」を遂行することである．

しかしながら，あまりにも真面目で，自分に対して厳格すぎる人は成長とともにコンプレックスを多く抱え込む傾向があり，神経症状や分裂症状を呈することがある．つまり，自我の歪みや硬化によって，意識的自我と本来的自己との内的な自己関係の形成がうまくいかず，人格全体の均衡がとれなくなる．そのような場合，心理学的には，抑圧されたコンプレックスの解放や見え隠れする可能性の実現を援助する必要がある．その手法として，フロイトの精神分析による「自由連想」やユング派の「箱庭療法」などがある．

ともあれ，心の奥底に不透明に潜んでいる情動のこだわりやコンプレックスを自覚化して解放することで“自我と自己の内的関係性”が新たになり病的症状は消失するが，しかし可能性を透明化しきった時は，ナルシスと同じように死が訪れる危険がある．その意味では，人生は直線的にプログラムされ，それに合わせて迷いなく生きるのではない．すなわち，生きるうえでの迷いと苦悩がなくなることは，同時に生きる意味をも喪失することを表していよう．なぜなら主体として同一でありながらも，「昨日の自分」と「今日の自分」についての自己関係に何らかの成長の差異がなければ，迷いや苦悩もないかわりに，成長も喜びも生きがいもないからである．

3．自我の病と身体的パフォーマンス

言語の生みだす二項対立の性質から，客観／主観，自我／自己，生／死と区別して，一方の項より他方の項が正しいと考える傾向が生じる．たとえば自我と自己を対立させて，理性的な自我のほうが，不透明で感情を含む自己より信頼できる，つまり，自我と自己の関係を切断し自我だけで生きていけるという考え方である．したがって，自我中心的になりがちな現代人は，身体内において「自我と自己との内的自己関係」が柔軟な形で成立せず，また身体外において「自己と他者との外的自己関係」が容易に融合しない状況にある．彼らは，さらに，高度情報化の環境によって加速されて「自己完結的で摩擦回避的」な人間となり，本来的自己を喪失して「自我の病」に陥っているといえよう．

このような，現代人がよって立つ自我（エゴ）の観点から脱出する方法とし

て心理療法が考えられるが，もっと日常的には，それは身体を基盤とする動作つまり「身体的パフォーマンス」によっても与えられる．すなわち，自分を中心とした発想は，実のところ身体によって「観点」を移動することによって容易に相対化され主客合一化される．なぜなら，現に「今，ここ」であった観点は，一歩前へ踏み出すと「あの時，あそこ」の観点となるからである．

この意味で，「身体」は二項対立的思考法や独我論から脱出するのに大きな働きをなす．また，内的関係性から形成された自己と外的関係性によってつくられた自己が同時に「おいてある場」でもある．したがって身体によって人間は，内側の無意識の世界にも外側の無限の環境にも広く開放されているのである．そしてさらに，身体の移動とともに観点が移動する場所が，“身体的パフォーマンス”が行われる「環境」であることも注目されてよい．

いうまでもなく，既述したように，身体動作をおこなう場としての環境は偶然に満ち限界があるかぎり，不透明である．それにもかかわらず，私たちは大地に足を踏みしめる安心感を得るために，身体とそのパフォーマンスによって「病んだ自我」を脱して環境を広げて，ある程度の透明感の中で生きることが不可欠なのである．

以上の持続しつつ自己差異化をなして内的関係性を循環させる本来的な自己も，空間的な環境に生きる外的関係性の均衡を保つ自己も“身体”において統合される．そして“身体的パフォーマンス”によって，全体的自己の不透明なヴェールが一枚一枚はがされて，「自分とは何か」が次第に認識されることに注意しておきたい．

III　箱庭療法のコスモロジー

今までのことから，自己の不透明性，そしてそれは身体を媒介にしたパフォーマンスによって，少しずつ透明化し本来的自己が自覚されることが明らかになった．

次に，パフォーマンスを少し伴った心理療法によって，病んだ自我を脱し新

たな自己関係を形成する「箱庭療法のコスモロジー」を考察しよう．

1．箱庭の治療的道具立て

治療的道具立てとして，道具そのもの，道具の機能，治療的人間関係と技法の順に述べよう．

まず第一に「道具」として，箱庭と砂および玩具が必要である．

箱庭療法の「砂箱（縦57cm×横72cm×深さ７cm）」は，外側は黒く，内側と底は青く塗ってある．この砂箱に玩具箱から適当なオモチャを選んで，厳格な二項対立の価値観を離れたイメージの世界で少しのアクションつまり創作的パフォーマンスをおこなう．箱庭の内側が青いことで，側面においては背景としての空，底面では砂を除くと川や海や池を表すことができる．

「砂」は乾いたもの，湿めらせたもの，色のついたもの，また時には土が使われたりするが，乾いた砂が使われるのが普通である．必要な時は，クライエントが水を入れることもある．

「玩具」は，統一された規格のオモチャでなくてもよく，種々の大きさのものや，クライエントが作った粘土の作品を置いてもよく，自由である．

第二に「道具の機能」として大切なことは，「箱」が枠に囲まれていることである．それは，カルフが述べるように，面接において「母子一体 Mutter-Kind-Einheit」を体験する守られた空間であり，クライエントとセラピストのコスモロジーの展開する空間である．箱庭の枠の保護があってこそ，内面の自由なパフォーマンスは可能となる．

「玩具」は，緊張し硬化した自我をゆるめイメージを広げるのに役立つ．また「砂」は，玩具とともに，自我退行を促進する．それによって，本来的自己が活動しやすくなる．さらに砂は大地との接触という，クライエントが忘却していた身体感覚の重要な感覚である“触覚”を覚醒させる．

第三に「治療的人間関係と技法」について述べよう．クライエントが１人で箱庭を作って治るのではなく，「治療的人間関係」によって，つまりセラピストと共有する空間において内的コスモロジーが展開され，それが箱庭の中に投影

され，自由な自己表現ができて治っていく．この意味で，クライエントとセラピストは一体となってコスモロジーの世界に生きるのである．

そして「技法」を施行する時の教示は，簡単に「この箱庭で遊んで，何か作ってみてください」という．「記録」は，自分からクライエントが話したり説明したりすることや，また玩具を置いていく順序や時間もつけておく．面接が終わってからスライドにしておくと，面接の進行状況に伴って箱庭のテーマとともにストーリーができあがって興味深いし，面接の場面で気づかなかったことに気づくことが多い．「質問」は，作品が仕上がった時，「これはどのような箱庭ですか」と尋ねるが，それ以上はふつう質問しない．クライエントの最初の説明で一応満足するが，必要と思われる時セラピーがさらに尋ねたり，またクライエント自身が話を展開することも，ままある．

箱庭療法の全般的なコメントとして，セラピストは，作品が作られる間，受容的な態度で，そのコスモロジーを共に味わうような気持ちで接することが大切である．箱庭を作るか否か，玩具の種類や規格，箱庭創作の時間などは，基本的に拘束されず，クライエントの内的パフォーマンスを容易にする「場」が提供されることが肝要である．

2．箱庭というコスモロジーの展開——自己表現としての箱庭療法——

箱庭の作品は，セラピストとクライエントとの治療的人間関係を母胎として生み出されたクライエントの「自己表現」であり，それを「心象 image」として観る．それは，意識と無意識，外界と内界の交錯する領域に生じたものを，視覚的な像としてとらえたものといえる．この意味で，箱庭に生じるイメージは，自己関係を二項対立する以前の本来の「全体像（セルフ）」として直覚的にとらえられる．

このような箱庭作品のイメージの特徴は，具象性・直接性・集約性をもつ．「具象的」で「直接的」なことは作品の表現からよく理解できる．これは絵画や夢よりも，より端的なものである．また「集約性」ということは，クライエントの心の内部の諸問題を１つの作品の中に集約的に表現していることを示

す．しかし，それは固定したものではなくて，集約的であるがゆえに，かえってそこから心の内部の多様な可能性を示し，それが自律的に変形し個性化することを示唆するものである．さらに，「力動性」も付加できよう．箱庭のコスモロジーはそのつどの内的世界を自己表現するが，それは初回から始まって面接の終了までの間にダイナミックなテーマとストーリーを展開するからである．

以上の箱庭のイメージの特徴である具象性・直接性・集約性・力動性は，心的な展開を「象徴」的に自己表現している．したがって，そのつどの自己表現である作品を理解するには，象徴的な解釈が必要となる．しかし，１つの作品から唯一の解釈や断定は避けなければならない．つまり，セラピストとクライエントとの関係を重視し，セラピストはできるだけ受容的にクライエントに接し，作品が作られている間は無用な介入を少なくするのが原則である．その意味で解釈は，クライエントにできるだけ与えず，創作中の心の動きに十分したがって，彼の作りだすコスモロジーを共有する姿勢が大切である．

このように考えると，箱庭における自己表現に対する意味づけや解釈は不要のように思われるが，それなしでは治療が行い難いところに，心理療法の二律背反性がある．つまり，面接の場面において「受容すること」と箱庭作品を「解釈すること」とは，実のところ相補的な働きをしている．すなわち，受容を深めるためには解釈が必要となり，意味ある解釈をするためには受容的態度が必要となる．

こうしてクライエントは，箱庭に自己表現されたものの意味をフィードバックして感じつつ，それを土台として，セラピストの受容的態度に支えられて，両者の相互作用によって，円環的に「以前の自分」と「今の自分」との自己関係を自覚して，より深い世界へと自己探求を進めていく．

3．箱庭の治療機能――コスモロジーとパフォーマンス――

箱庭のコスモロジーは，制限された空間の中で自由に振る舞う即興的パフォーマンスであるといえよう．外部の騒音の入らない劇場がカウンセリング・ルームであり，舞台は箱庭である．主役はクライエントで，観客はセラピストで

ある．演技者であるクライエントの即興演技は，それを観賞する観客であるセラピストに影響を与えながら，また影響される．こうして，演劇であるコスモロジーが，相互に作用されつつ自己展開する．

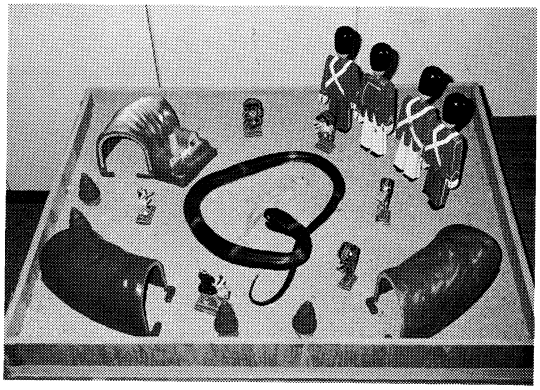
カウンセリング・ルームという劇場はクライエントが傷を受けた外部の世界を遮断し，その中で彼は箱庭の舞台で自由に演技するが，そのドラマによって明確でない「不透明」な深層の部分を「有」の形として表すのである．このようにして，内的な自己表現をパフォーマンスとして演じることにより，人間の深奥に存する「自然治癒力」が動き出す．

このようなコスモロジーは，心理療法からさらに拡張して，「生きる意味」を与えるであろう．それは，社会学者のバーガーがいう「聖なる天蓋 canopy」でもある．心理治療を受ける人々は，人生観・世界観の指針である聖なる天蓋の破れによって，神経症的症状や精神病的症状が生じた人々ともいえよう．儀礼や病気の時，アメリカのインディアン・ナバホ族やオジブワ族がパフォーマンスとして「砂絵」や「岩絵」を描くことによって，コスモロジーを回復し聖なる天蓋を修復することと符合している．

以上のことを，まとめておこう．箱庭療法が治癒力をもつのは，自己の内的イメージを「ピッタリした感じ」で表現でき，それが目の当たりにフィードバックされる点による．つまり，母子一体感を体験できる箱という枠に守られて，過剰な自我意識がゆるめられ，本来的な自己が活性化されやすくなる．いいかえると，砂との接触による身体感覚の目覚め，玩具による自我退行の促進，内的イメージの飛翔，フィードバックによる気づき，自分の作品を観賞することによるカタルシス効果などを通じて，自我と自己，内界と外界の分裂した自己の「対立関係の意味」を直覚することで自然治癒力が働き出す．こうして，自己関係し成長し続ける全体的な自己同一性（本来的自己）に再統合がもたらされるのである．

Ⅳ　自己表現としての箱庭療法――事例を中心として――

1.　精神の自己表現としての「死のイニシエーション」



写真①　死のイニシエーション

まず自己表現としての箱庭の各作品には，「テーマ」があることを具体的に示してみよう．「人生の問題」を抱えた男子高校生（17歳）によって，「死体」と名づけられたこの作品（面接は18回ですべて箱庭を作る）は，9回目の面接の時のものである（写真①）．このクライエントは，人生の無意味さ・自殺念慮・不登校を訴えていたが，面接過程の半ばで，「死のイニシエーション」が箱庭のコスモロジーとして展開した．

箱庭の中央に大きなガイコツをくわえたヘビがとぐろをまき，その様子をインドの神々とオニ（大きな兵隊）が見ながら，クライエントに判決を下している．「魂が地獄の苦しみを味わう．神々とオニが判決を下す．食い殺しというか，なま殺しというか．僕は，これ，『死体』です」という．

死のイニシエーションは，箱庭療法では「死と再生のテーマ」としてよく現れる．これは“精神の自己表現”として，今までの自分を殺して新しい自分に生まれ変わりたい，という内面の変化すなわち眠っていた自己差異化の開始を

象徴していよう．それが，全面接のちょうど半ばに表現されたことも興味深い．これから後半に，「古い自我の自分」と「本来的な自己の自分」との自己関係の戦いが継続され，「自分との仲なおり」に至るまでの内面の再統合への努力が続く．

2. 具象的な自己表現としての「手」

写真② 具象的な「手」

ここでは，「箱庭の治療過程」を概観してみよう．

中学3年男子のクライエントは，父との葛藤から神経性嘔吐を呈して不登校となり，病院から紹介されて来室した．

クライエントをセラピストAが，母と父をセラピストB（筆者）が面接した．クライエントは，セラピストAに対して終始母親に対する陰転移の感情をぶつけることで，悪い子として「やり残しの仕事」を行う．面接の経過とともに母性を乗り越えたクライエントは，次に父性との葛藤を始める．あまりにも大きな存在，完璧な存在であった父に対する反感は，心の奥深くで戦いながら新たな自我を形成して解消されていく．それと並行して，症状も消失し学校も安定して出席できるようになる．

箱庭の作品（面接は33回で箱庭は10回）の流れは，第一期は登校開始までであるが，作品が「ゲームの戦い」から「本格的な戦い」と変化し，第二期は情

動表出としての反抗期となり作品には積極的な内面が表現される．つまり生命力をイメージする魚・カエル・ヘビなど，また攻撃性を表す道路から逸れたスポーツカーなどが使われた．しかし，ひととおりの攻撃性が表出されたこの時期から，人間はすべてピエロやユーモアのある人物として表現される．他人は必ずしも自分を拘束したり命令したりするだけではないことが自覚され，心に余裕ができ主体的に自己を把握できるようになった．自我の変革によって，今までの環境が新たな世界として映ったのである．

面接13回目の箱庭（7作目，写真②）において，父が別の面接室で作った作品に手を加えて，「郵便自動車」を左のほうに，そして「手型のキー・ホルダー」を藪の中に置き，あとで「お父さん，気づくかな」といったことが印象に強く残った．郵便自動車は，左手前にいる父（変態したカエル）へのメッセージを運ぶもので，藪の中に置かれた“具象的な手”は，まだ恥じらいながらクライエントが厳格な父に別れを告げ，信頼のおける父を手招きしている具体的パフォーマンスを示す自己表現であろう．

3．身体の自己表現としての「円形脱毛症」

最後に，内面の葛藤が身体自体に表現された事例を示し，それがパラレルな形で「箱庭にパフォーマンス」された状況をみてみよう．

円形脱毛症の病歴8年になる青年男子（19～20歳）の事例を紹介する（面接は9回ですべて箱庭を作る）．

夢分析も箱庭も初回のものに，クライエントのもつ問題点が集約されて表現されることが多い．第1の作品（第1回の面接，写真③-1）にある中央のお地蔵さんは，脱毛が治るようにと祈る対象であり，またお地蔵さん自身「毛」がない．そしてクライエントはお地蔵さんのように身体に症状（頭部12×6㎝，右側頭部12×9㎝）を現すことで，深層の自己分裂をかろうじて守っているとも考えられる．さらに後方の白いウマ（クライエント）は，長い髪の毛の女性のほうに向かっていることも象徴的である．

第2の作品（写真③-2）は，6回目の面接の時のもので，この頃に2.5㎝ほ

写真③-1　お地蔵さん

写真③-2　新しい島の出現

ど髪の毛が伸び散髪に行けるほどに回復する．この作品は「新しい島の出現」というテーマであった．この中央の島は，クライエントの頭頂部の脱毛領域とほぼ同じ形であること，そして新しい島としての毛が生えてくることが，常識的な予想を超えている．内面の葛藤が身体に脱毛症としてまず現れ，それから無意識の中にある問題をパフォーマンスとして箱庭に投影することで治癒していった興味深い事例である．

人間は自我意識を超えて，本来的自己が動き出した時には，無意識の内容を——それがコンプレックスであれ可能性であれ——自己表現せざるをえない存

在なのであろう．

V まとめ

ナルシス神話から，人間の存在の意味を問うことは，一方で必要なことであるとともに，他方でその意味をつきつめることは危険なことであることを知った．人間の心は，すべてを透明化するのではなく，少しの不透明さを残しておくことが大切である．ある程度の闇の中に生命力や可能性が存在してこそ，人間は希望をもって生きていけるのである．

しかしながら，自我が歪んだり硬化したりして，自己関係が新たに形成されず生命エネルギーが停滞して病的症状が現れている時には，やはり不透明さに隠されている問題点を明らかにする必要がある．そのためには，身体レベルのパフォーマンスを行うことで硬化した自我が解放されて本来的自己が自らを生きることも多いが，時には心理療法も使われなければならないであろう．

そのことを示すために，「自己表現としての箱庭療法」を，治療過程の中の部分的作品から見てきた．

そこから理解できたことは，深層の不透明さによって隠されていた「あるがままの自分」は，内面のコスモロジーの展開——それはフロイトのような狭義の言語ではなく視覚的で象徴的なものであるが——によって明らかにされるということである．

人生のプロセスは，「あれか，これか」の一義的選択ではなく，人生の不透明なヴェールに隠されたほのかな希望の光に向かって「あれも，これも」担ってこそ，豊かなものになるのである．

参考文献

I

1）T. ブルフィンチ：ギリシャ・ローマ神話，角川文庫，1982.

2）S. Freud, Einführung des Narzißmus：ナルシシズム入門，人文書院，1978.

II

3）S. Kierkegaard, Die Krankheit zum Tode：死にいたる病，中央公論社，1965.

4）C. G. Jung：Über Grundlagen der analytischen Psychologie, Fischer Taschenbuch Verlag, 1975.

5）廣松　渉：もの・こと・ことば，勁草書房，1987.

6）木村　敏：自己・あいだ・時間―現象学的精神病理学，弘文堂，1987.

7）木村　敏：偶然性の精神病理，岩波書店，1994.

8）小此木啓吾・河合隼雄：ユングとフロイト，思索社，1979.

9）丸山圭三郎：フェティシズムと快楽，紀伊国屋書店，1987.

10）丸山圭三郎：欲動，弘文堂，1988.

11）中川米造：病いと癒し，大阪大学医学部最終講義録，1989.

III

12）D. M. Kalf, Sandspiel：カルフ箱庭療法，誠信書房，1979.

13）河合隼雄：箱庭療法入門，誠信書房，1969.

14）河合隼雄・中村雄二郎：トポスの知―箱庭療法の世界―，TBS ブリタニカ，1984.

15）河合隼雄・山中康裕編：箱庭療法研究（第1巻～第3巻），誠信書房，1982・1985・1987.

16）木村晴子：箱庭療法―基礎的研究と実践―，創元社，1985.

17）三木アヤ・光元和憲・田中千穂子：体験箱庭療法，山王出版，1991.

18）P. L. Berger, The Sacred Canopy：聖なる天蓋，新曜社，1979.

19）久武哲也：アメリカインディアンの聖なる絵巻物―オジブワ族の絵図とコスモロジー，〈葛川絵図研究会：絵図のコスモロジー（下巻），地人書房，1989所収〉.

IV

20）岡田康伸：箱庭療法の基礎，誠信書房，1984.

21）岡田康伸：箱庭療法の展開，誠信書房，1983.

22）谷口文章：円形脱毛症の箱庭療法過程―時間的制約下での催眠療法の併用―，日本箱庭療法学会：箱庭療法学研究，Vol. 3，No. 2，1990.

23）谷口文章・小谷英子：神経性嘔吐をともなう不登校男子の箱庭療法，甲南大学紀要　文学編79，1991.

24）谷口文章：青年期初期の『人生の問題』を抱えた男子高校生に対する箱庭療法，甲南大学紀要　文学編83，1992.